

ハイ
ゲ
レ
変態洗脳

雪の
グ
ス編





「くそっ、何なんだよ!!? こいつらは……!!!」

ピンク色の光線が空中を飛び舞う中
シンフォギア装者である雪音クリスは1人毒づく



クリスは今、普段相手にしているノイズとは異なる存在に襲われていた
奇妙な格好・武装をした、謎の光線銃を携えた男たちである
1人1人はそこまでに強くはないが男たちのその数の多さに
彼女の顔は険しさに歪む

何より、男たちが次々と放ってくるピンクの光線だ
何が何でも自分に当てようとしてくる男たちの執拗さから
クリスは知らず知らずの内にそのピンクの光線に脅威を抱き始めていた



とはいったものの、いくら大量に襲ってこようとも
その数はやはり無限ではない
男たちの数は目に見えて明らかに減り始めてきていた

——大丈夫だ、勝てる



「…………♪」

無意識ながら勝利を確信し、クリスの表情が緩む
が——その油断が命取りだった



ズン——ズン——
ズン——ズン——

「あ——
!?!」



虎視眈々とクリスの油断を狙っていた一条の光が見事に彼女の背中へと命中しその光が全身に広がっていく

（あ、当たっちゃった……!!!）

クリスの表情にひどい焦りの色が浮かびあがった
だが、クリスはすぐさま強気な顔つきへと戻って勝気に呟く



「くっ……!!こんな攻撃効くかよっ……!!」

痛みすらも感じないたかだか一発の光線
それを受けただぐらいで一体どうなるとい
うんだ
と、直前まで抱いていた不安を全力で否定し強
気になるクリス
しかし……。



「あ！ あっ………!!？」

自分の身体に纏わりついてた光が急速に強まり
包み込まれていく様に強気な表情は一瞬で崩れ去ってしまおう



「あああつ………!!」

抵抗も出来ずうろたえることしかできないクリスは
なすがまま光線の強い光の中へ飲み込まれていき……



「ああ
!!!?」





数刻の間、激しいピンクの閃光に覆われるクリス
その間にも彼女を包むシルエットは大きく形を変え
その影は小さく変化していくのだった

そして――

「なつ、なんだよ！ これ——!!」

光が止み、そこから晒された自分の姿にクリスは絶叫をあげる。重苦しく赤にカラーリングされた彼女の武装は完全に消えうせ代わりに纏うものは非常に窮屈なハイレグ水着一枚のみであった。



「ど、どうなったんだよ!? この格好は……!!!」

叫ぶクリスの顔には激しい羞恥の色が浮かんでいる
それほどまでにその赤のハイレグ水着の面積は少なく
露出度が非常に高いきわどい水着だったのだ



激しい羞恥心に見舞われるクリリスだったが
ようやくある恐ろしいことに気づく

（お、おい、ふざけんなよ!? こゝんなところで……!!!）

そう、こゝは地上から大きく離れた空中

シンフォギアの力を失いよりにもよってこんな生身の
ハイレグ姿で落下したりすればまず命はなかった
身体がまだ浮いていられるのは力が完全に失われていないからなのか



「うっ……!!」

突如、露出している尻のふくらみから強い違和感を覚えたクリス
慌てて尻に目を向けてみればそこには気味の悪い笑みの形をした印が
少しずつ尻のふくらみに浮かび始めている最中だった

（な、なんだ……っ！れ……？）



「あつ……!!?」

クリスは思わずその印を手で拭いたくなる衝動に駆られたものの
印の完全な顕現と共にぞくぞくと全身を震わせ甲高い声をあげた



「っあ、ああ……!!」

艶のこもった溜息をもらし、思考がうまく働かなくなっていくクリス
それがトリガーとなつたのか空中に浮かんでいた彼女の身体が
がくんと下がりに、そしてそのまま真つ逆さまに落下していく



(ち、ちくしょう……
な、なんとか……
な、なんとか……
な、なんとか……
しねーと……)

真つ逆さまになりながら、クリスは懸命に打開策を練る
けれども、戦う力を失い裸同然の今の彼女には
もはやどうすることもできなかつた



ダメだ、自分は死ぬ
このまま地面に叩きつけられて、ぐちゃぐちゃになつて死ぬ
その瞬間をクリスは脳裏に鮮明に思い浮かべてしまい
股間にかけての力が急激に抜けていくのを感じた



が、そうはならなかった。

「おおっと、危ない!!」

そうやって、無様に足を開きながら落下していく
クリスを慌てて救出する存在が現れたのだった
だが、それはこともあるうにクリスのことを狙い
散々追い掛け回した男の1人だったのである



「ふふ、危ない所だったな」

「……っ!!」

「ん？」

ふん

ふん



謎の男に救われたクリスは死への恐怖からか
ハイレグ水着越しの股間を通して
勢いよく尿を放出してしまおうのだった

どしどし物物物物!!!



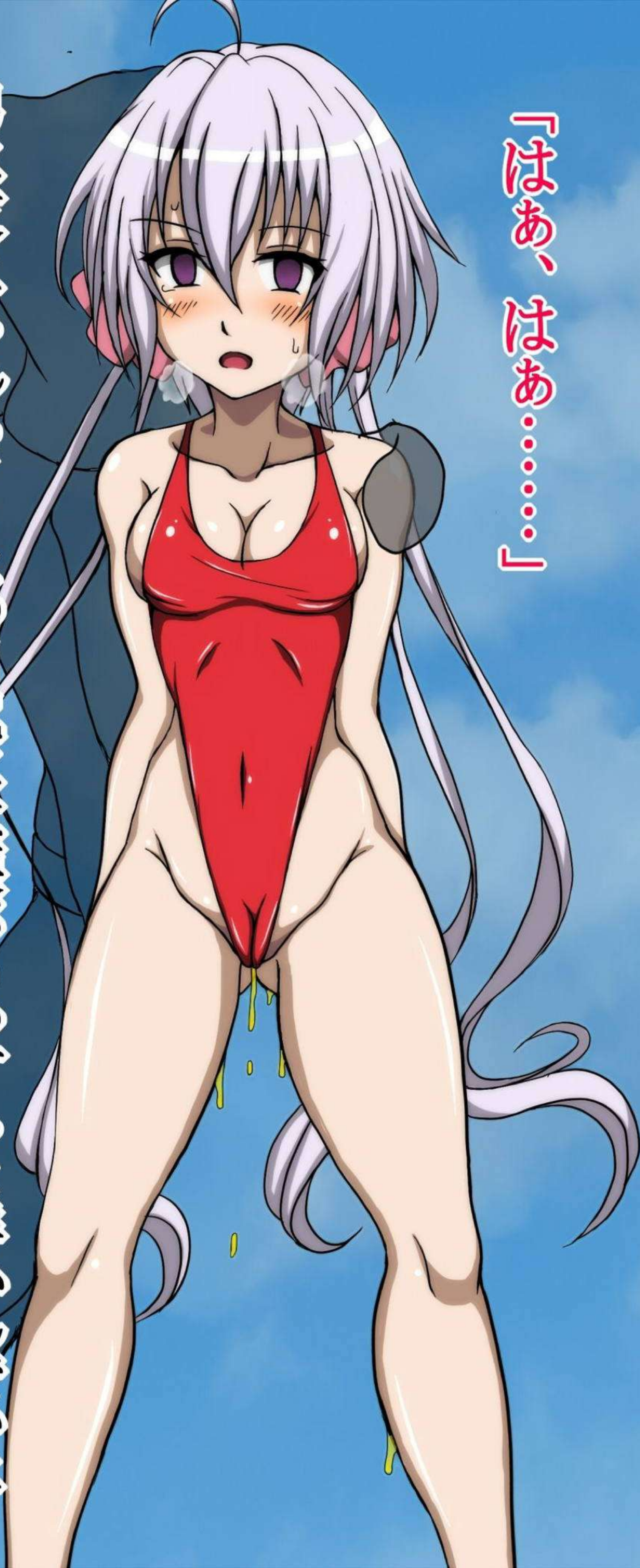
「お〜よしよし、怖かったのだな。もう大丈夫だ」

男はそんなクリスの醜態を目の当たりにし
まるで赤子を宥めるかのような調子で優しい声をかけ
ハイレグ水着一丁だけとなつたクリスを地上へと送り届けていく



「はあ、はあ……」

男に支えられるクリスの目尻には涙がうつつすらと浮かんでいた
しがみつくとように男の身体に背を預けるクリス
その顔には普段の強気な表情は欠片も残されてはいなかった



しかし、地上へ降りたつやいなやクリスは
男の手を乱暴に拒絶し、普段の強気な態度で問い詰める

「お、おまえ……!! なんてあたしを助けた……!!」



「何を言っている？ 仲間を助けるのは当然のことではないか」

「な、仲間………？ なんてあたしがお前らの仲間なんだよ………!!」
「………その赤い水着と尻に刻まれている印がなによりの証だ」



「さあ、新たなる同胞よ。
ハイグレ人間の一員として服従の意を示したまえ！」

「な、なにを……ふざけた、ことを……」



クリスは男の言葉を吐き捨てようとしたものの
その言葉が合図の如く尻の印が妖しく発光し始めた
するとクリスは舌がとろけて、脳裏に霧がかかったのよう
に何も考えられなくなってしまうたのだった

「はっ、ああん……」



クリスは艶のこもった吐息を漏らしながら
突然、両の足を大股にはしたなく開いたかと思うと
腰を深く沈め、がに股の体勢をつくり出してしまおう

「はあ、はあ………」

スウッ…



おぼろげな意識の中でクリスは自分の行動に首を傾げる
だが身体が、本能が、クリスの理性などと押し退けて
勝手に動いていってしまったのだった

（あ、あたし………何やってんだ………）



「ふふ、そうだ。それでいい、続けたまえ」

「あ、ああ……」

男の甘い囁きも手伝って
がに股ではしたなく開帳された股間のラインに向けて
クリスはすうっと両の手を伸ばし――



「は、ハイグレ…ハイグレ…ハイグレ…ハイグレ…」

クリスはそう呟きながら
両の腕をぎこちない速度で上下させる。とどろより
股間の前で何度も何度もVの字を描き始める。



（なんでえ……）

こんなアホな「とやっつてんだ……あたしは……」

自分が行っているポーズがどれだけ間抜けなことか
理解しているはずなのに、けれども辞められない
辞めるどころか、その動きは回を増すごとに
きびきびと鋭さを帯びた動きへと変貌していく





ニャっ
はぁ

はぁ

じわっ

「.....あはっ♥」

「ハイグレっ！ ハイグレっ！ ハイグレっ！ ハイグレっ！」

はぁ はぁ

がつつくように股間に向けて
何度も何度も腕を振り下ろすクリス
やがて、陰部からはポタポタと淫らな液体が滴り
赤のハイレグ水着を黒く湿らせていくのだった



「ハイグレっ！ ハイグレっ！ あはっ、はは……」

（き、気持ちいいっ……!!
ははっ……さ、最高だっ、これえ……!!）

クリスの表情はそのがに股ポーズによって得られる快感によってすっかり支配されてしまっておりもはやその卑猥なポーズの虜と化してしまっていた



「ハイグレレ！ ハイグレレ！ ハイグレレえつ………!!!」

「よしよし、どうやら

ハイグレレ人間である」ことの自覚が出来たようだな」

「は、ハイグレっ………!!!」

形振り構わずひたすら股間に腕を下ろし快感を貪るクリスの変わり果てた姿を見て男が満足そうにそう呟いたと、クリスは「満悦な様子で男に答える



「あ、ああ………!!

あたしはもう人間でも
シンフラオギア装者でもない………!!
『ハイグレ人間』なんだっ………!! は、ははっ………」

「ふふふ。そう、君はもうハイグレ人間なのだ。

さあ、自覚出来た所で改めて

洗脳者である我々に忠誠の意を示したまえ！」

「ハイグレっ!!」



「ハイグレっ！ ハイグレっ！ ハイグレっ！！
ハイグレっ！！
あ、あたしの名は、ハイグレ人間雪音クリスだっ！！」

「あたしのすべて、ハイグレのために捧げること誓うっ！！
さあ、なんなりと命令してくれっ！！
ハイグレ、ハイグレ、ハイグレっ！！
ハイグレっ！！」

はあ♡

はあ♡

ポタ

ポタ



「はははっ、ようやく素直になれたようだな」

「ああ、アンタのおかげだ……
ハイグレの素晴らしさにやっとな気がついたので……」

「ふふふ、ではこれから我々と共に働いてもらうからな
しっかりと頼むぞ、ハイグレ人間雪音クリス！」

「ハイグレッ!!」

はあ♡

はあ♡

ポタ

ポタ



こうして、謎の水着とポーズによる魔力に完全敗北し
謎の組織の忠実なるシモベと化してしまつた雪音クリス

ハイグレ人間として彼女に課せられた最初の任務は
スパイとして隠密に暗躍することだつた

そして、数日後――。

はあ

はあ

ポ

ポ



ハイレグ水着一枚のみを纏ったクリスの次女が変わららずそこにはあった
手にはあの奇妙な男たちと同様の光線銃を握られており
視線の先にはクリスと同じくハイレグ水着を着せられた女性が
尻を突き出すような形でビクビクと地面に突っ伏していた

「ふん、手間取らせやがって」



「……おら何してやがる、さっさとスイグレ始めねーか」

「ひゃらっ……?!」

突き出された尻に裸足の足裏を叩きつけ、クリスは一喝する。その顔はまるでゴキウを見るかのような冷酷な笑みがかんていた。



彼女をスイグレ人間に変えた男の前では
とたんに鼻の下を伸ばした情けない表情を浮かべてしまう
まるで意中の人物に褒められた恋する少女のような表情である

「あっ……アంతか。な、なんだよ、来てたのか……」

「いやいや、きみの洗脳活動が目まぐるしいようなのでね。
きみをスイグレ人間にした者としても実に鼻が高いよ」

「よっ、よせよ……照れるじゃねーか……」

「ふふっ。だが、仲間にはもう少し優しくななくてはダメだぞ?」
「ち、ちげーよっ。こいつ、私に踏まれて喜んでたんだっ……!!」
「な? そうだろっ? おらっ!」

「ふあっ、ああ。そ、そうですら……!!」

クリスはあわててそう取り繕いながら
新入りハイグレ人間の尻を再度踏みつけ同意を求める
ヨクヨクとろくなずくその様子は話を合わせているというより
本気で気持ちよくなっているようであった

「やれやれ。君に洗脳された者は
どうもドMになる傾向があるようだな。それはそうと——」

「あつ……!!」

呆れ気味に微笑を浮かべつつも、男がクリスの肩に手を置く
と、とたんにクリスのハイレグ水着が発光を放ち始め
その光は彼女の首元を覆うほどまで大きくなつていくのだった



「ふふふ。スパイ活動を頑張っている君に、褒美だ……。この格好で、これからがんばってくれたまえ」

「あ、あはあつ……」

より滑稽で痴態度があがったその服装に
けれどもクリスはまるで豪華なドレスを着せられたかのように
うつつりとした恍惚な表情を浮かべて喜ぶ



（なんて、良いんだ……この格好……）

新たに与えられた服装に酔いしれるクリスは
興奮を抑えきれないところで、
熱い吐息を漏らし
股間からは快感の証である蜜が早くも垂れ出し始める

はぁ

はぁ

その光景を満足そうに眺め、男はクリリスの耳元に手を置くくと
仕上りの様にクリリスの顔に漆黒のアイマスクが顕現するのだった
「これからも、期待しているよ」

「ああ、まかせてくれ……!!!」



クリスは男、そしてハイグレへの忠誠心を示すように
膝折って跪き、深々と頭を下げ、
その後姿にはかつてのシンラオギア装者としての面影は
微塵も残されてはいない





男が跪くクリリスの頭を撫でる
クリリスはそれを感じ持ちよさそうな顔で受け、悦びから地面を濡らした
完全に男の忠犬と化してしまっただキグレ人間雪音クリリスの暗躍は
これからますます激しいものとなるっていくことだろっらっ——

ハイグレ変態洗脳

〜雪のクオース編〜









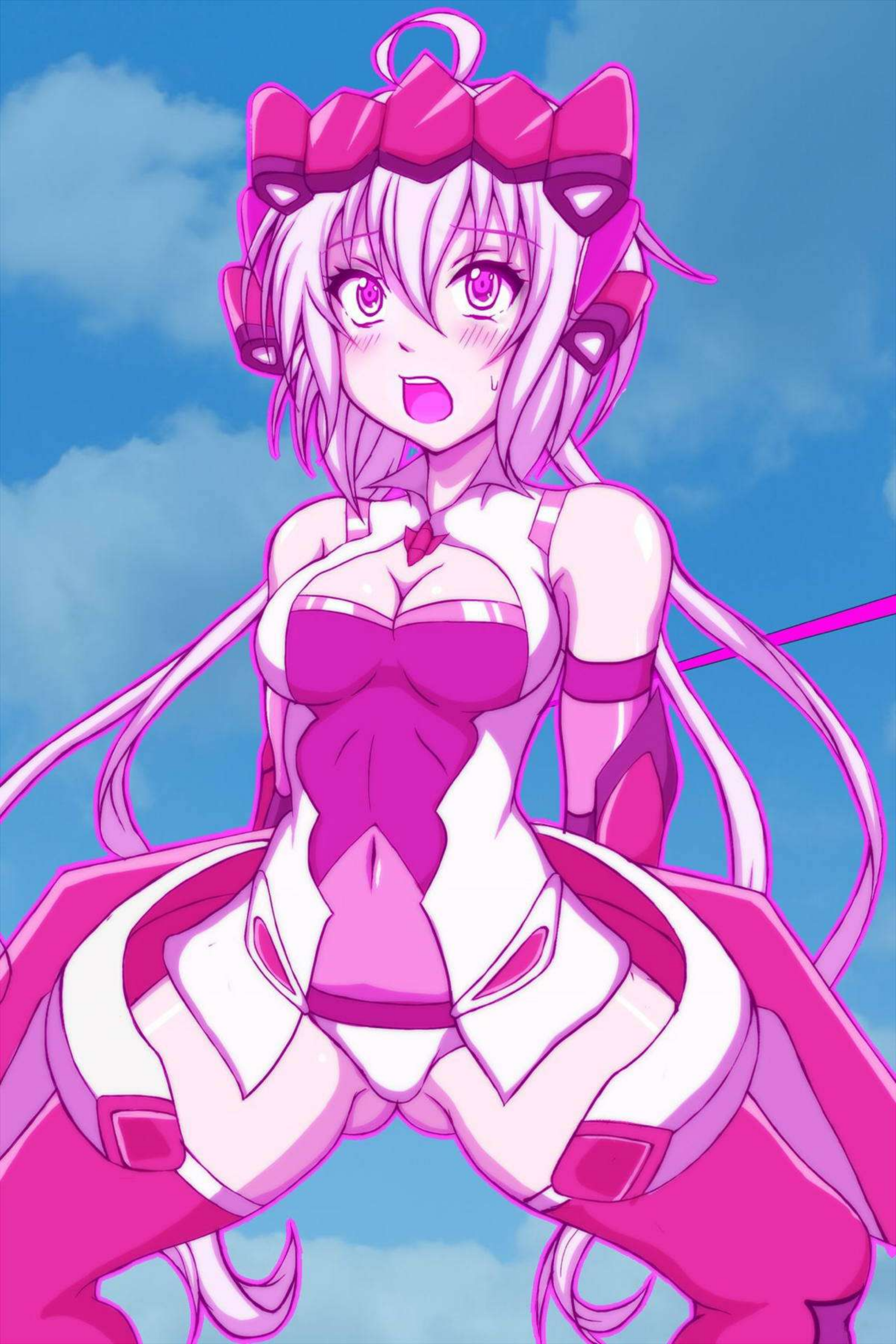


















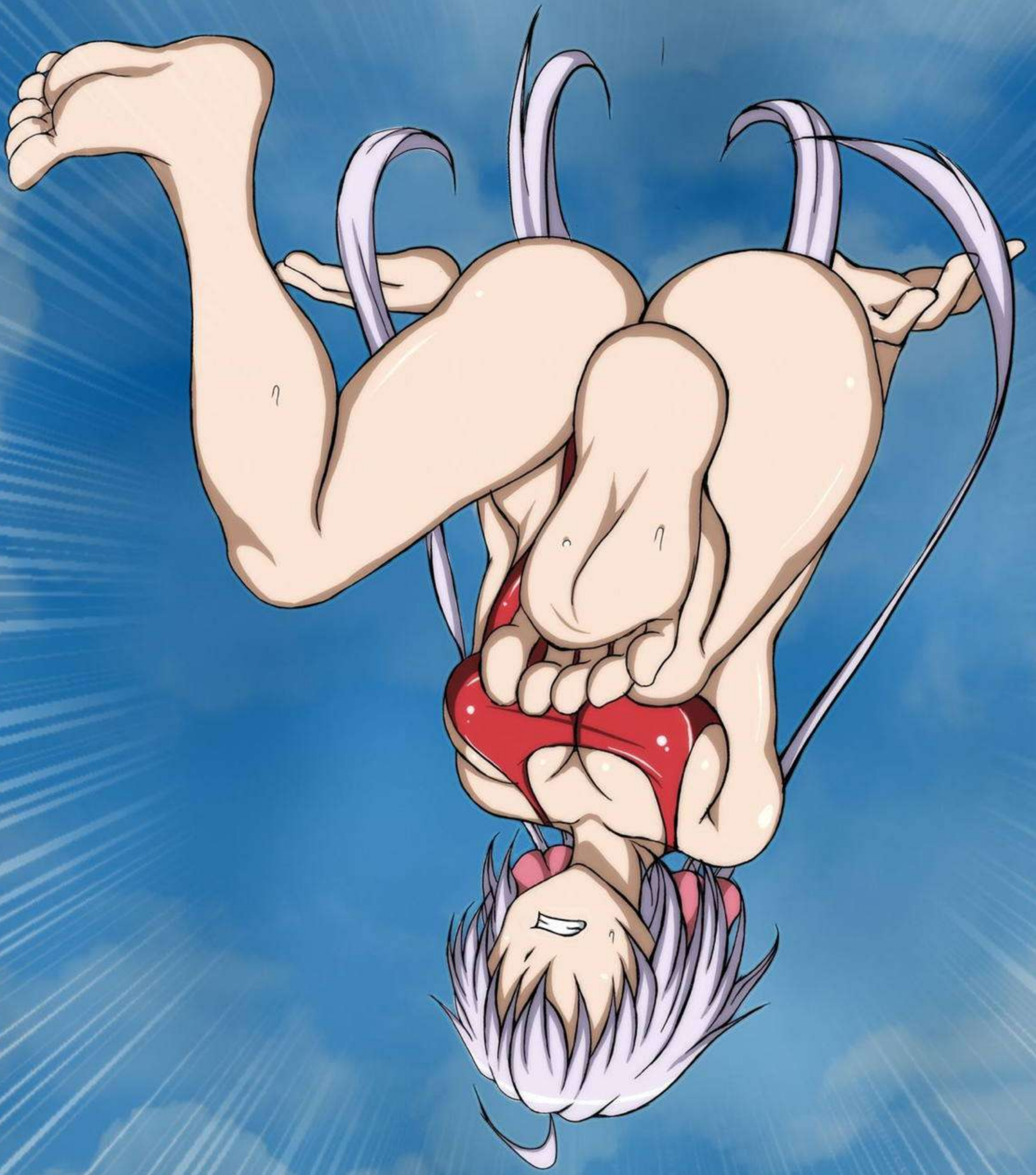


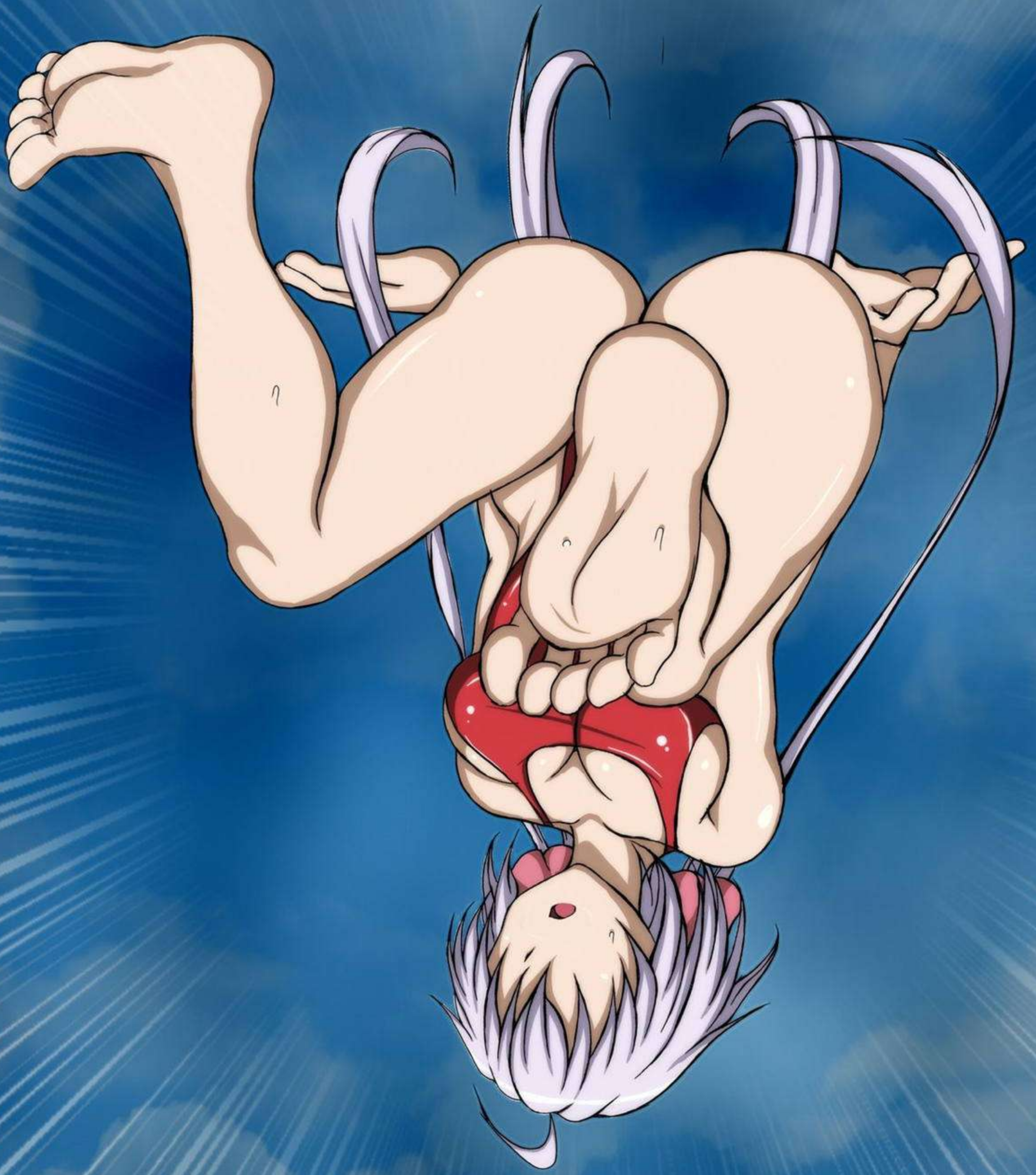


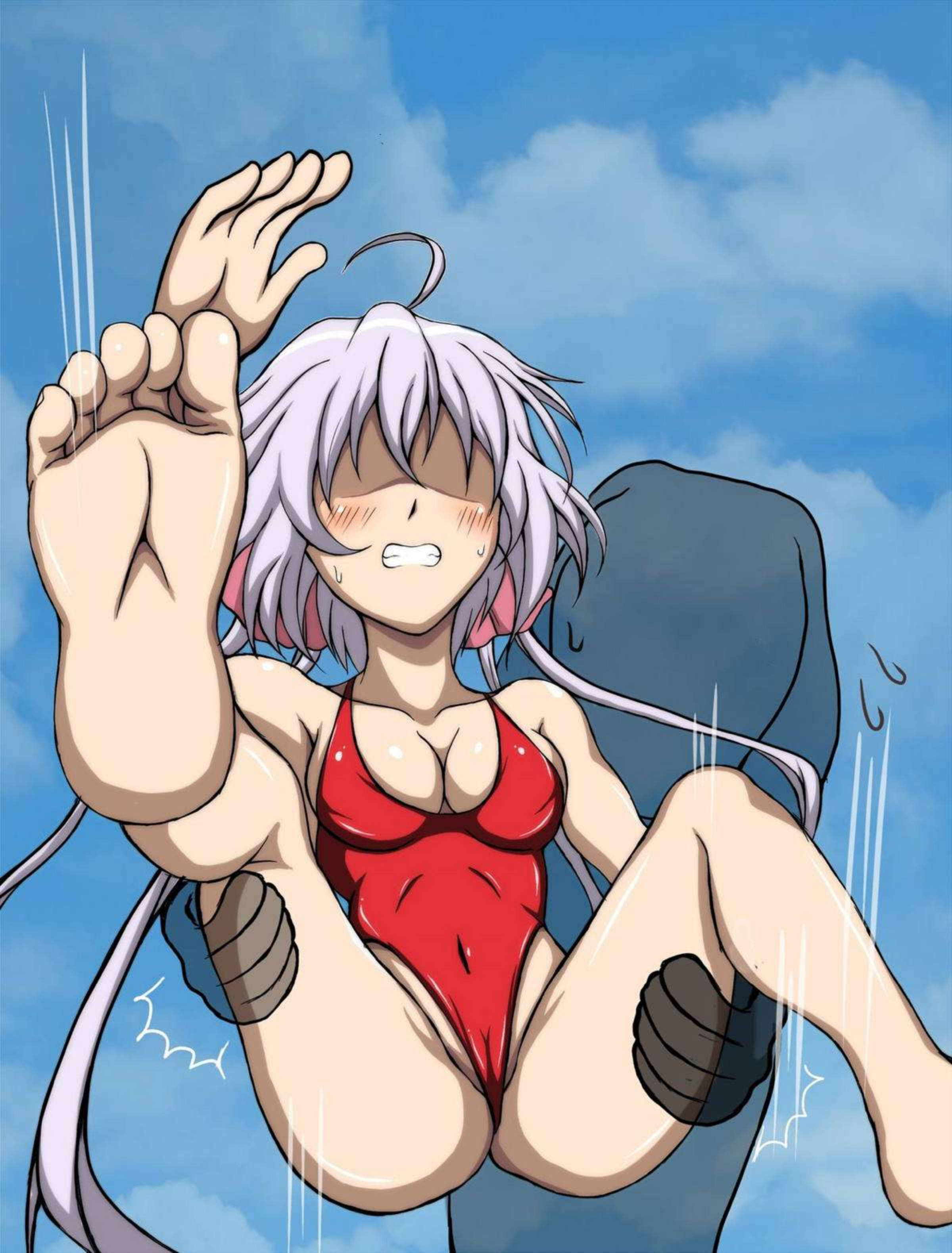


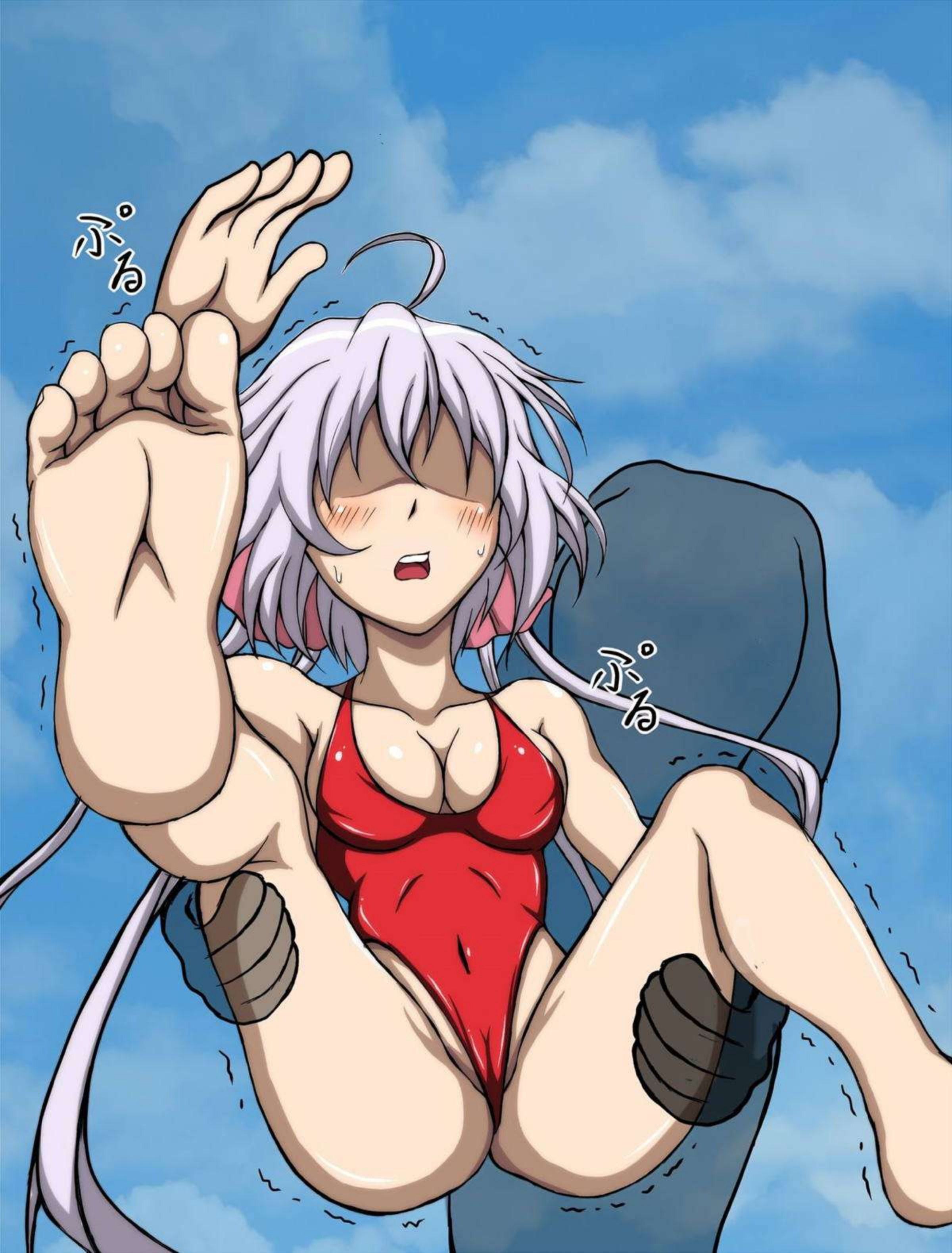


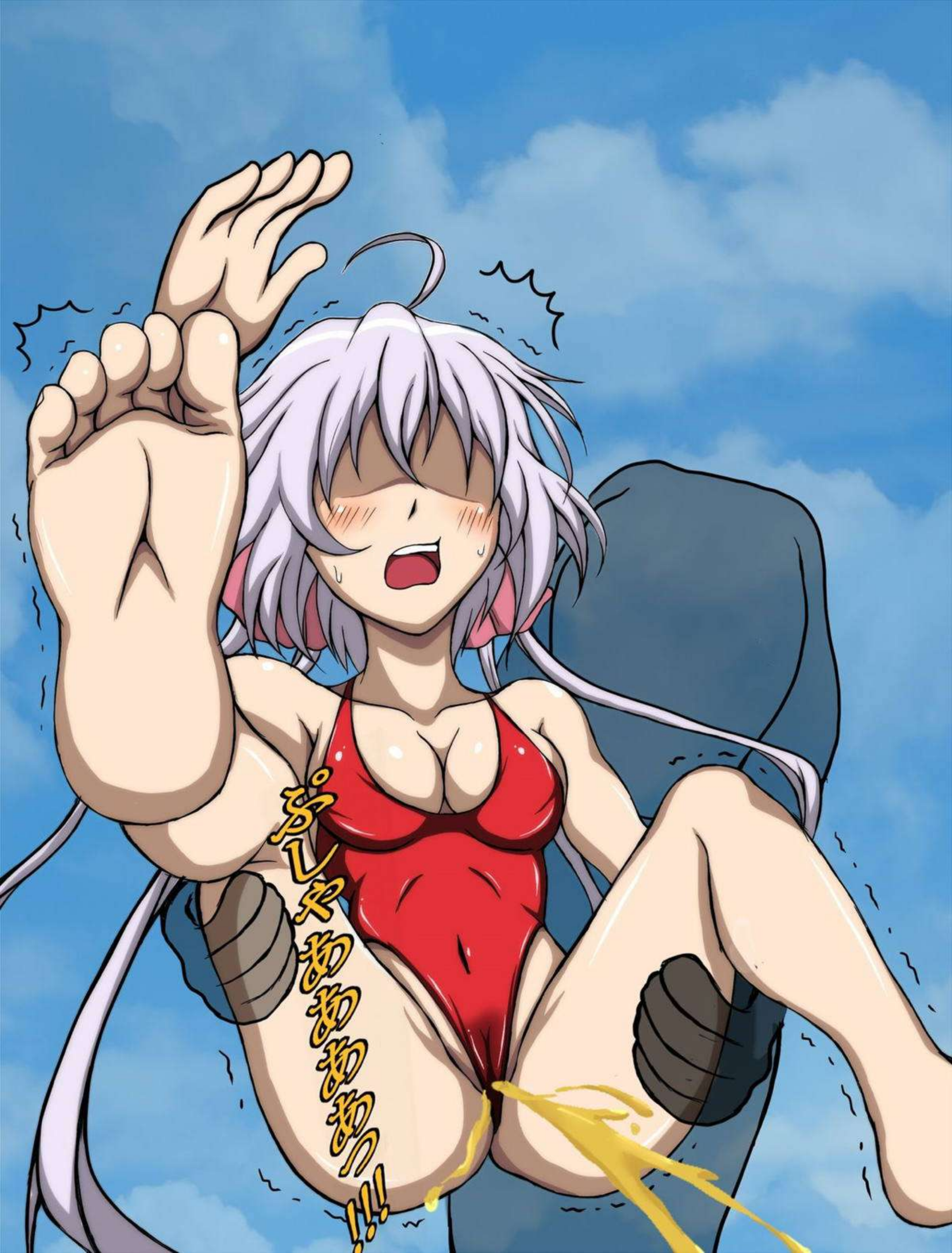












どしどし物物物物!!!



















ニャっ
はぁ

はぁ

じゅっ











はあ
♡

はあ
♡

ポタ

ポタ



はあ
はあ

はあ
はあ

ポタ

ポタ



はあ

はあ

水

水









「やれやれ。君に洗脳された者は
どうもドMになる傾向があるようだな。それはそうと——」

「あつ……!!」

呆れ気味に微笑を浮かべつつも、男がクリスの肩に手を置く
と、とたんにクリスのハイレグ水着が発光を放ち始め
その光は彼女の首元を覆うほどまで大きくなつていくのだった





















アイグググ
レレレ

アイグググ
レレレ

はあ

はあ

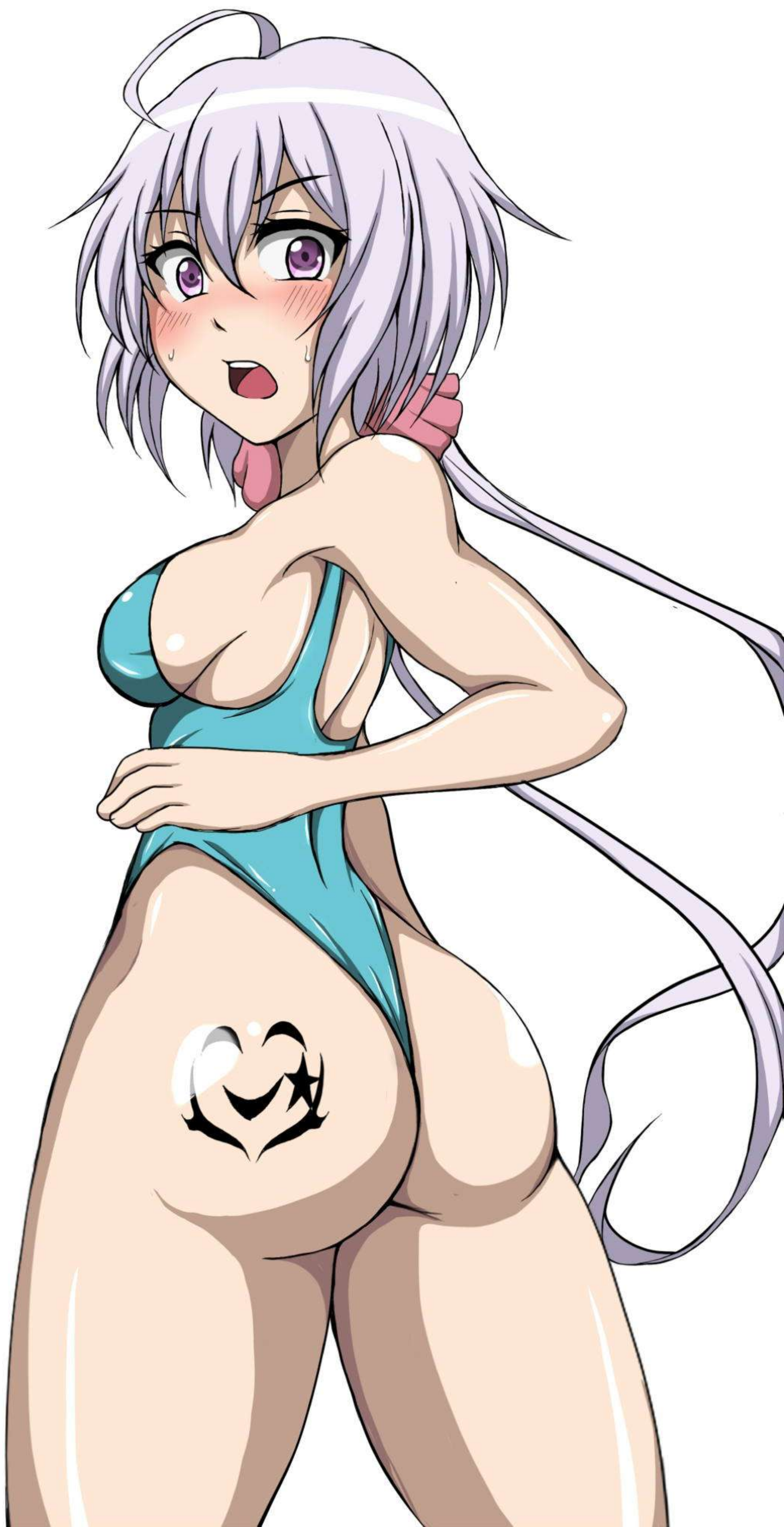


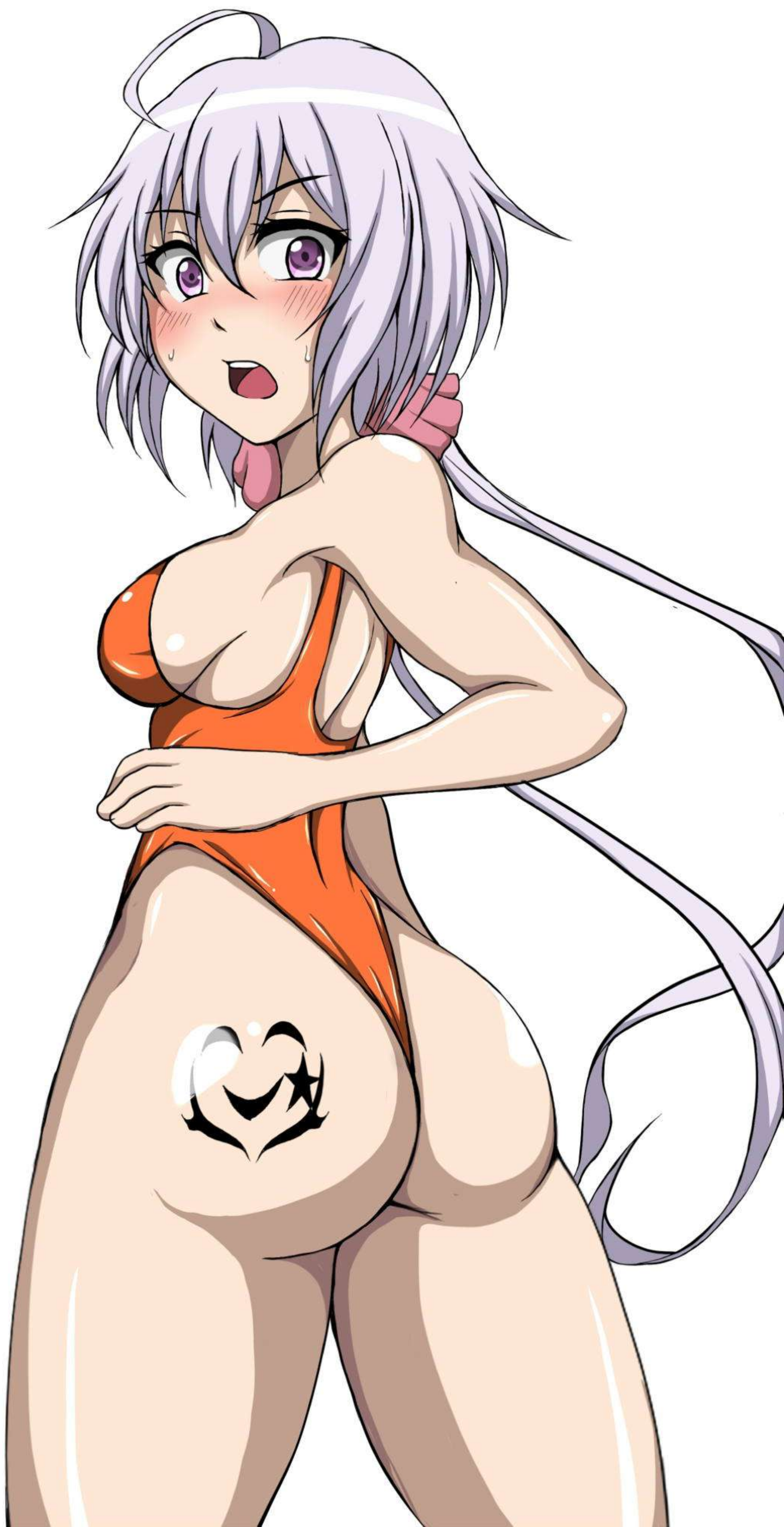


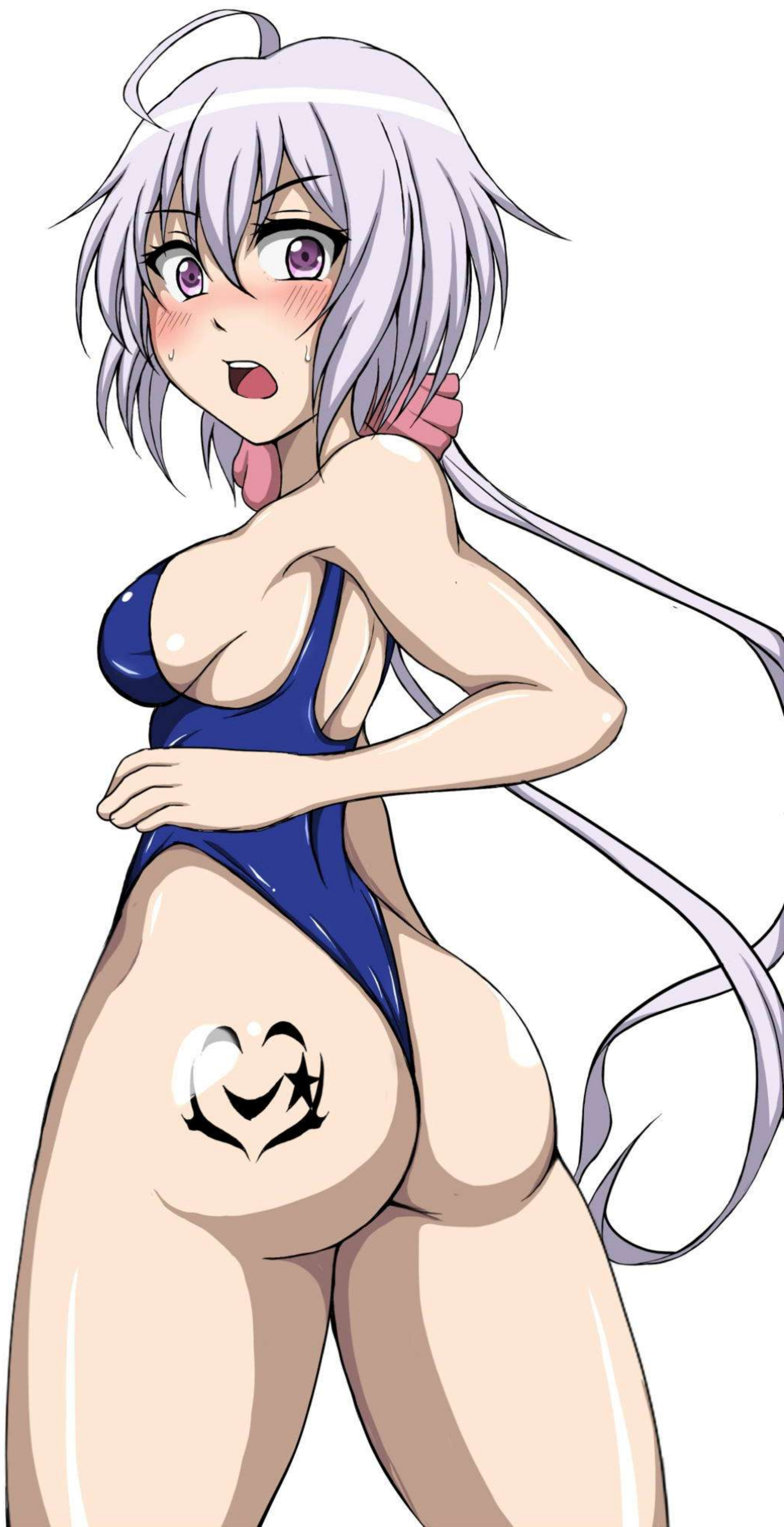


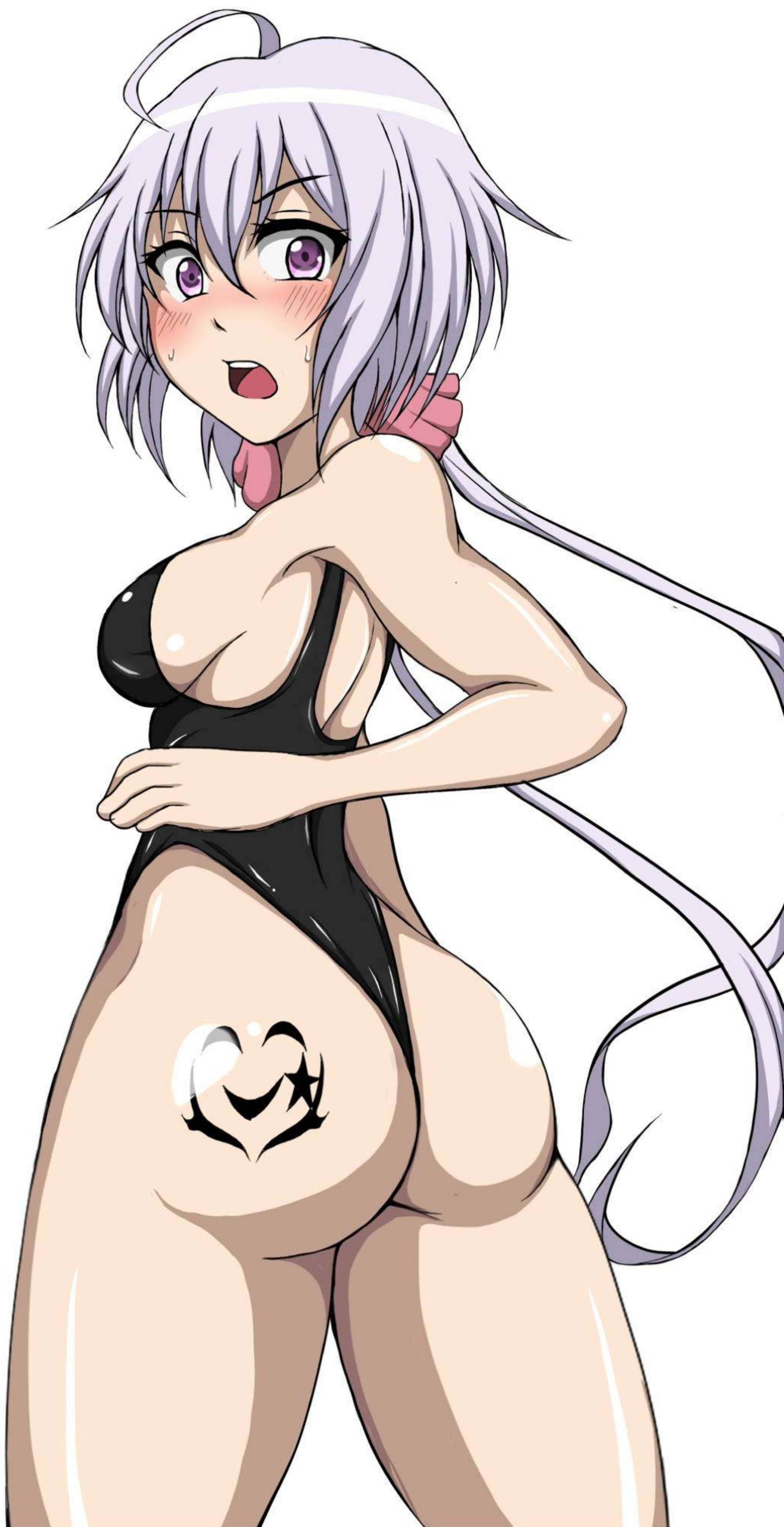


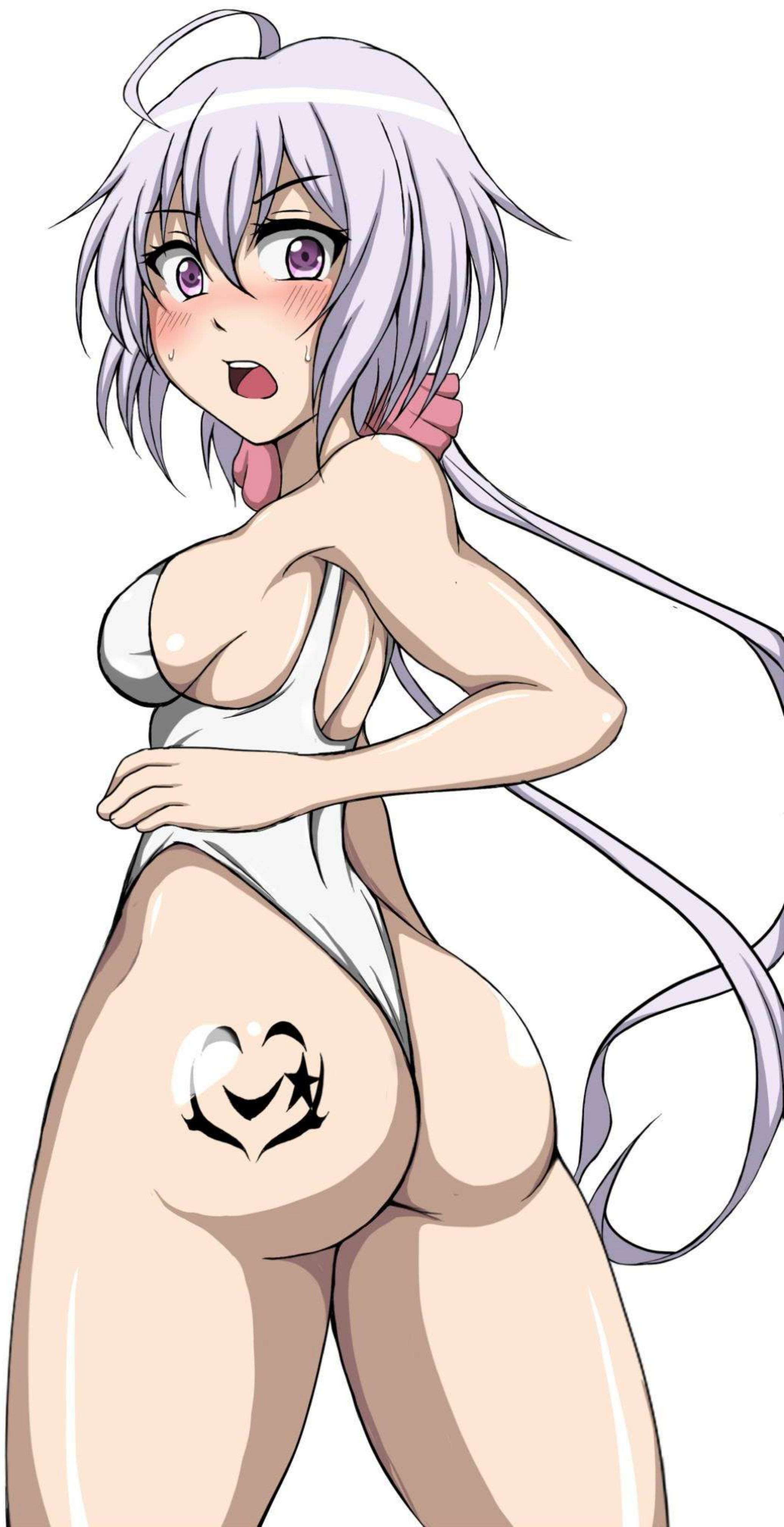














ハイグレっ、ハイグっ……
か、身体が勝手に……!!
なんで、こんなみつともない「おっ
グレっ!! ハイグレええ!!

く、くそっ!!
ハイグレ人間なんて……!!
なつてたまるっ、……ああっ!?
ハイグレ! ハイグレえ!!



ハイグレ♡ハイグレ♡
ハイグレ人間雪音クリス
只今、洗脳完了致しました!!

ハイグレ人間にして頂き
本当にありがとうございます!!
ハイグレ♡ハイグレ♡
ハイグレええ♡♡

はあ♡

はあ♡

ポタ

ポタ





ハイググレッツ

ハイググレッツ

はあ

はあ

ポタ

ポタ



ハイググレッツ

ハイググレッツ

はあ

はあ

ポタ

ポタ



ハイググレツ

ハイググレツ

はあ

はあ

ポタ

ポタ



ハイググレッツ

ハイググレッツ

はあ♡

はあ♡

ポタ...

ポタ...



ハイググレツ

ハイググレツ

はあ

はあ

ポタ

ポタ



ハイググレツ

ハイググレツ

はあ♡

はあ♡

ポタ...

ポタ...





ハイググレッツ

ハイググレッツ

はあ

はあ

ポタ

ポタ